

## 3. 熱中症はどれくらい起こっているのか

## 3. 熱中症はどれくらい起こっているのか

全国で6月から9月の期間に、熱中症で救急搬送された方は、暑い夏となった2010年は56,119人、2013年は58,729人で、年齢層別では65歳以上の高齢者が最も多く、2013年は27,828人で全体の47%を占めています(図1-4)。

また、図1-5に、東京都および政令指定都

市の2000年から2013年までの救急車で搬送された熱中症患者数を示しました。高温の日数が多い年や異常に高い気温の日が出現すると発生が増加すること、ここ数年、特に2010年以降、大きく増加していることがわかります。

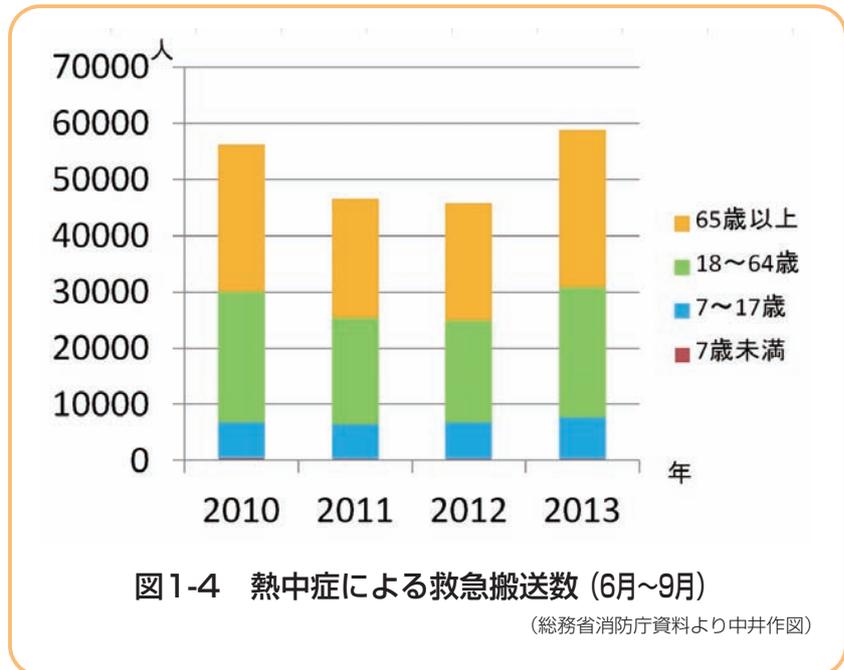
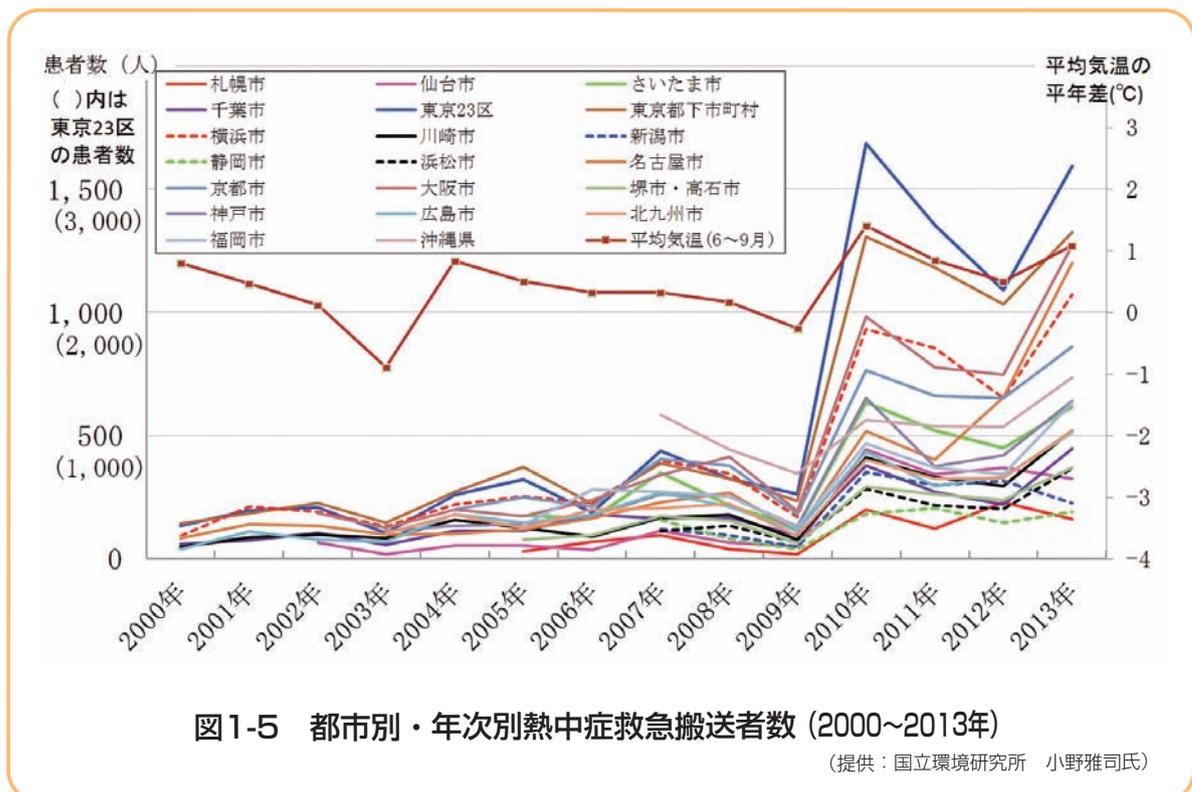


図1-4 熱中症による救急搬送数 (6月~9月)

(総務省消防庁資料より中井作図)



### 3. 熱中症はどれくらい起きているのか

熱中症による死亡数は、1993年以前は年平均67人ですが、1994年以降は年平均492人に増加しています。これは、夏期の気温が上昇していることが関連していると考えられます。これまでで最も暑かった2010年は1,745人（男940人、女805人）でした（図1-6）。

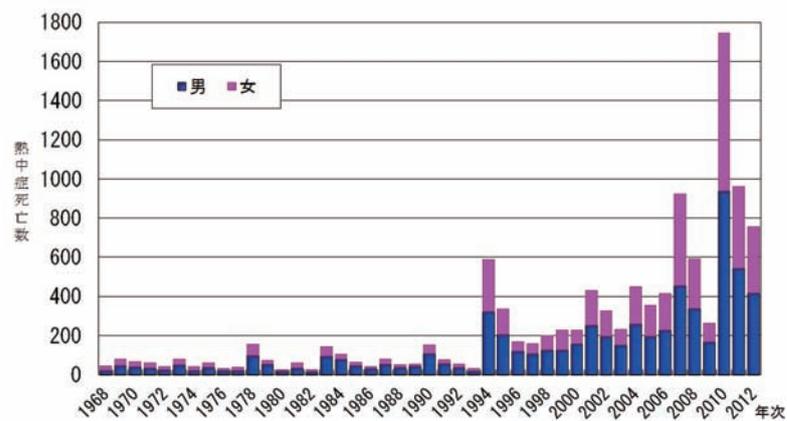


図1-6 年次別男女別熱中症死亡数 (1968年~2012年)

(厚生労働省人口動態統計より中井作図)  
「熱及び光線の作用」(T67)による死亡数を集計

男女別の年齢階級別の死亡数は（図1-7）、男性では0～4歳、15～19歳、60～64歳および80～84歳を中心とする年齢層で多く、一方、女性では0～4歳と80～84歳を中心とする年齢層で多くなっています。

年齢層ごとの発生は、15～19歳はスポーツ、30～59歳は労働、65歳以上は日常生活での発生が多いと考えられます。0～4歳は45年間で288件でありそのうち0歳が158件（55%）で自動車に閉じ込められたなどの事故でした。

また、熱中症死亡総数に占める65歳以上の割合は、1995年は54%で

したが、2008年は72%、2010年は79%に増加しており、高齢者の割合が急増しています。

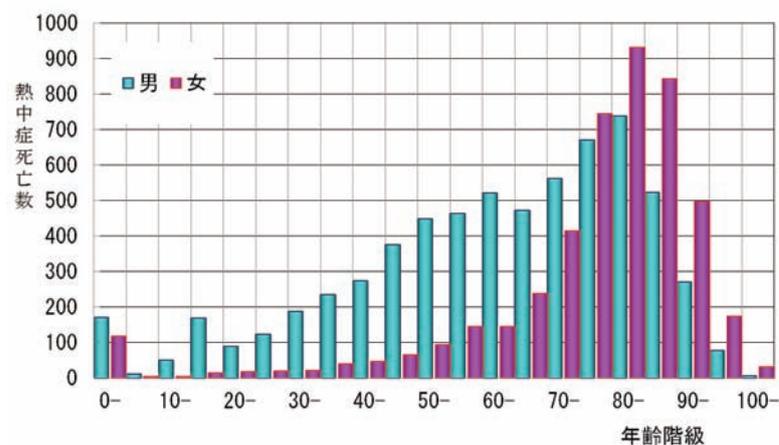


図1-7 熱中症死亡数の年齢階級別累積 (1968年~2012年)

(厚生労働省人口動態統計より中井作図)  
「熱及び光線の作用」(T67)による死亡数を集計

図1-8に、2013年の東京都および政令指定都市で救急搬送された熱中症患者を、年齢階級別に発生場所の種類別に示しました。このように、熱中症は日常生活、運動中、作業中など様々な場面において発生していますが、年齢別に見ると中高校生では運動中、成年層では作業中、高齢者では住宅で多

## 3. 熱中症はどれくらい起こっているのか

く発生していることがわかります。

近年、家庭で発生する高齢者の熱中症が増えており、高齢者では住宅での発生が半数を超えています。2010年の厚生労働省人口動態統計では、死亡者のうち家庭が45.8%を占めており、家庭で発生する高齢者の熱中症に対する対策の必要性が高まっています。

